

WSISチュニス フェーズを終えて

NHKチーフアナウンサー
(前WSISチュニスフェーズ
親善大使)



どうでん
道傳 あいこ
愛子

WSIS親善大使を務め終わって

まず初めに、この1年間皆様には大変にお世話さまになりました。無事にWSISの親善大使の仕事を終えることができ、ほっとしております。ありがとうございます。この場で初めてごあいさつ申し上げましたのがちょうど1年ほど前。サミットが終わってからもう1か月ほどたちました。親善大使としてWSISについて見てきたこと、考えましたことの一部をお話し申し上げられたらと思います。

親善大使はふつう女優さんなどがなさいますので、本当に私でいいのかと随分心配いたしました。実際には国の内外でWSISについての広報活動を行うというお仕事を頂戴し、チュニスでは、日本政府主催のワークショップ、ITU主催のハイレベルパネルの2つのモデレーターを務めました。

ICTのフロントランナーである日本をPR

内外の広報活動のために、総務省のご担当者が名刺を作ってくださいました。「See you in Tunis」と書いてあり、この名刺を正に世界中の皆様にお配りしました。その中には、インタビューをいたしましたアメリカのライス国務長官や世界銀行のウォルフォウィッツ総裁なども含まれます。

私の役目としてどういうことをメッセージとしてアピール

したらよいかと思いましたが、まず、日本がICTの分野でフロントランナーであること、ユビキタスネットワークを推進していることを伝えることが大事だと思いました。サミットではご存じのように、最終的な文章の文言の中にも盛り込まれております。

そのメッセージをどう伝えるのか。サミットがチュニジアで行われるということもありますので、デジタル・ディバイド解消というところには是非引きつけて伝えようと考えました。ユビキタスネットワーク社会というのは、絵に描いた餅ではなくて、いずれは口に入るかもしれない、必ず手が届くお餅なのだというメッセージを伝えたいと思ったわけでございます。

国連のミレニアム開発目標の中にも、貧困解消のためにICTは役立てられなければならないということが盛り込まれておりますので、それは世界的にも共通認識となっていることでしょう。私は番組を担当しておりますので本来業務がございますが、机の上にある本がいつのまにかユビキタス関連一色になり、同僚は不思議に思ったことでしょうか、そんな中で準備をしまっていました。

日本の存在感をアピールしたパビリオン会場

サミットに参加してとてもうれしかったことがあります。それは日本の存在感が随所に感じられたことです。一つはジャパンパビリオンの中の展示です。産業界の皆様にも大変ご協力いただきましたが、サミット開催の3日前には既に準備ができておりました。中には当日近くになっても角材が床に転がっている国もあれば、準備が終わっていないのにチーズとワインで乾杯をしている国もあつたりしましたが、ジャパンパビリオンは、前日にはデモンストレーションができるくらいの準備万端の状況でした。何か、日本のプロフェッショナルイズム健在ということが感じられました。

二つ目は、このジャパンパビリオンには、最初の2日間だけで5,000人の来訪がありました。これはジュネーブフェーズの記録を塗り替えるのではないかとこの勢いで、これも大変うれしく思いました。

さらにうれしかったのは、担当いたしました日本の「ユビキタスネットワーク社会の実現に向けて」というワークショップについてです。サミットの重要な精神として掲げられていたのが、マルチステークホルダー、政府・国際機関・企業・市民社会すべての社会のアクターが参加するというところで、そのすべての代表の方がこのワークショップには参加

してくださったということです。

世界的な取組で実現するデジタル・ディバイドの解消

サミットの中でそれぞれの立場の方が活発に意見を交わされるということも当然大事なのですが、サミットの前にジュネーブでITUの内海事務総局長にお話を伺いましたところ、サミットの後、「ポストチュニス」の世界的な取組というものがとても大事になるということでした。デジタル・ディバイドの解消は国際社会が一丸となって向き合わなければならない問題です。それには、国際機関も政府も市民社会も企業も協力して取り組まなければならないということを痛感いたしました。

そのなかで、これはおまけの話として聞き流して下さって結構なのですが、私は公共放送の一員としてその取組に参加できたことをうれしく思いました。ジャパンパビリオンでも、ハイビジョンと緊急災害報道の展示をさせていただきましたが、高い関心が寄せられました。NHKも公共放送として放送の普及、教育テレビの充実など、言ってみればデジタル・ディバイドの解消に向けて努めてまいりました。WSISの精神と重なるところです。その意味で、自分の仕事についても改めて考えるきっかけになりました。マルチステークホルダーの取組が正に大事なのだということ、私自身の立場からも再認識した次第でございます。

ますます重要になるマルチステークホルダーの役割

最後に一つ、数字を御紹介いたします。タイの取材をしておりましたときにミャンマーにまいりました。ミャンマーではICTの普及率がどのくらいなのだろうかと見てみましたところ、インターネットユーザー数は1,000人に1人でした。これは、イラク、アフガニスタンとほとんど変わらない数字です。特に大きな戦争の中にあるわけではないのに、こんなにもパーセンテージが低いということを実感しました。

「いつでも、どこでも、何でも、誰でも」アクセスできるようにするためには、インフラの整備はもちろんのこと、それがaffordableであるかどうか。あるいは政治体制がその利用を保証しているのかどうか。あるいは使いたいというモチベーションが人々の間にあるのかどうか。これらすべての条件が整わない限りはそれが実現しないのだということも改めて感じました。

そのためにもマルチステークホルダー、こちらにいらっしゃいます皆様それぞれが果たされる役割というのはますます大きいのではないかとということを心から感じました。私もそうした取組の中にお仲間に入れていただきましたことを、とてもうれしく思っております。御指導いただきましてありがとうございました。

(2005年12月20日 第344回ITUクラブ例会より)



日本政府主催ワークショップでの筆者



ITU主催ハイレベルパネルでの筆者